つくし

フォト劇場（36）

写真が生むものがたり

つくしんぼ千曲川（ちくま）の土手につくつくん帰らざる日
のはたてに摘みき　　手塚寿々枝

千曲川の辺りに通称〈ちくまばた〉があった。今は宅地。両親若く子ら幼き日、畑仕事をする傍らの土手で私達幼子は遊んだ。いっぱいのつくしを妹弟と摘みはかまをとり、油炒めかなにかで夕食の一品とした。

つくし生える土手に茶碗の欠片あり夕べ隣が夫婦
喧嘩して　　今村日出子

どうやら夫婦喧嘩の後、奥さんが腹立ちまぎれに表に出て茶碗を割り、その欠片がわが家の方にも飛んできたのだ。半世紀前はそんな解消法もあったらしい。スカッとしたね、とその人に話しかけてた母も思い出す。

写真・木畑紀子

土佐を発つ竜馬の足をくすぐりしつくしありけむ
嘉永六年　三浦陽子

顔を出したばかりのつくしは初々しい。洗ったような土の色をしている。土からの脱出は冬からの脱出だ。丈はちょうど踝の上くらい。群れていても一本でも、早春の弾むこころをくすぐってくれる。

「誉めよ大地を、讃えよ土を」つくしらのコーラスのせて春の風吹く　斉藤淳子

つくしは土の中から湧き出てくる春の息吹そのものだ。大地に光と風を受けて群生するつくしは、小さな人間達が集まって楽しく歌っているようにも見え、合唱曲「土の歌」の「大地讃頌」の一節を思い浮かべた。